

アジアの紛争経験国の 大学生を対象とした 平和構築紛争予防教育の 実践と評価

池田 満(南山大学人文学部心理人間学科)

福田 彩(東京外国語大学総合国際学研究院)

宮城 徹(東京外国語大学大学院国際日本学研究院)

本研究はJSPS科研費 15KT0042, 16K03514,
2015年度南山大学パッヘ研究奨励金1-A-2の助成を受けたものです。

2016.5.27 オバマ大統領の広島訪問

現職のアメリカ大統領の広島・被爆地訪問:「歴史的訪問」



http://www.asahi.com/special/nuclear_peace/obama/

では私たちの「平和」への意識はどうか？

- ▶ 戦後70年と日本人の平和意識－戦争未体験者（戦後生まれ）が全体の8割を超える（総務省統計局, H27.4.17発表、H.26.10.1現在、
<http://www.stat.go.jp/data/jinsui/2014np/>）。
- ▶ 現代の日本人にとっての「戦争」≡第2次世界大戦（東京大空襲、広島・長崎の原爆投下、沖縄戦など。
- ▶ 多くの日本人は戦争は過去のことであり、平和を日常と考えている。
- ▶ 「先の戦争」の悲惨さを語り継ぐ中で、平和の尊さに気づくことが、日本の平和教育の柱。

世界の人にとっての「戦争」「平和」とは？

- ▶ 第2次大戦後の戦争・紛争：印パ戦争、中東戦争（1次～4次）、パレスチナ紛争、チベット紛争、ラオス内戦、ベトナム戦争、中ソ国境紛争、北アイルランド紛争、カンボジア内戦、カシミール紛争、イラン・イラク紛争、フォークランド紛争、スリランカ内戦、アフガニスタン内戦、湾岸戦争、コソボ紛争、ソマリア内戦、アフガニスタン侵攻（対テロ戦争）、イラク戦争、スリランカ内戦、など、120以上
- ▶ <http://www.geocities.jp/unepeace/table-post2.html>
- ▶ 少なくない人々にとって、「先の戦争・紛争」は70年前の第二次世界大戦ではなく、現在進行形でもあるという現実（日本人との温度差）。

(日本の)平和教育の問題点(池野, 2009)

▶ 平和教育のタイプ

- ▶ 告発型: 戦争が悲惨であり, 戦争や核問題が深刻化, 重大化していることを問題提起し告発する学習(“被爆体験の語り”)
- ▶ 共感型: 戦争, 平和問題に対して, どのような努力がなされてきたかを追体験させる学習(“シンドラーのリスト”)
- ▶ 価値注入型: 戦争の原因を特定し, その解決は「こうあるべきだ」と問題解決の方向性を教え込む学習

▶ 問題点

- ▶ 心情, 情緒への過度の依存
- ▶ 立場や価値観の多様性の軽視
- ▶ 戦争教育化: 平和を戦争の裏返しであるように教え, 平和希求と戦争を無くすことを同一視させる

日本の心理学における 「平和構築・紛争予防」の位置づけ

- ▶ 正面に据えて扱う研究者は少ない。
- ▶ 『平和を創る心理学(第2版)』(2014)では、「犯罪と非行」「暴力とジェンダー」「偏見と差別」「自己肯定感と平和」「メディアと暴力」「幼児教育と暴力」等が並ぶ。
- ▶ 『紛争・暴力・公正の心理学』(2016)においても、個人、小集団、文化葛藤についての解説にとどまる。
- ▶ 国家、民族間の葛藤を扱うには、歴史、文化、経済、イデオロギー、宗教といった様々な問題が絡み合った現実を踏まえる必要。

私たちにできそうなこと

- ▶ 「平和国家日本」にある大学教育だからできることはないのか。
- ▶ 世界に平和を志向するメッセージを発信しつつも、世界の戦争・紛争の現状を知り、日本人が再考する場を持つことはできないのか。
- ▶ 教育学、心理学の観点から平和構築・紛争予防に貢献できないのか。

私たちのアプローチ：平和構築教育プログラム 紛争当事国を含む大学間遠隔教育

- ▶ 社会科学に基づいた学際的教育内容
- ▶ 実体験に裏付けられた授業
- ▶ 現実にして、「より良い解決策」を模索する授業

メンバー3人の役割

- ▶ 教育プログラムの**内容**検討⇔教育**効果**の検討⇔**プログラムの評価**

(3者の生み出す学際的アプローチ)

- ▶ 宮城(異文化間教育学・臨床心理学の視点)
- ▶ 福田(国際関係学・平和教育学の視点)
- ▶ 池田(コミュニティ心理学・社会心理学の視点)

平和教育プログラムの評価（観点）

（教育そのものの目標）

- ▶ 知識、スキル、行動レパトリーの獲得の有無
- ▶ 価値観、態度の変容の有無
- ▶ 平和的行動の発現（暴力的行動の減少）

（評価における第一目標）

- ▶ 短期的な成果・変化をまず調べる
- ▶ 教員、学生からのフィードバックを重視

グローバル・キャンパスプログラム

平和教育プログラム実践

はじめに



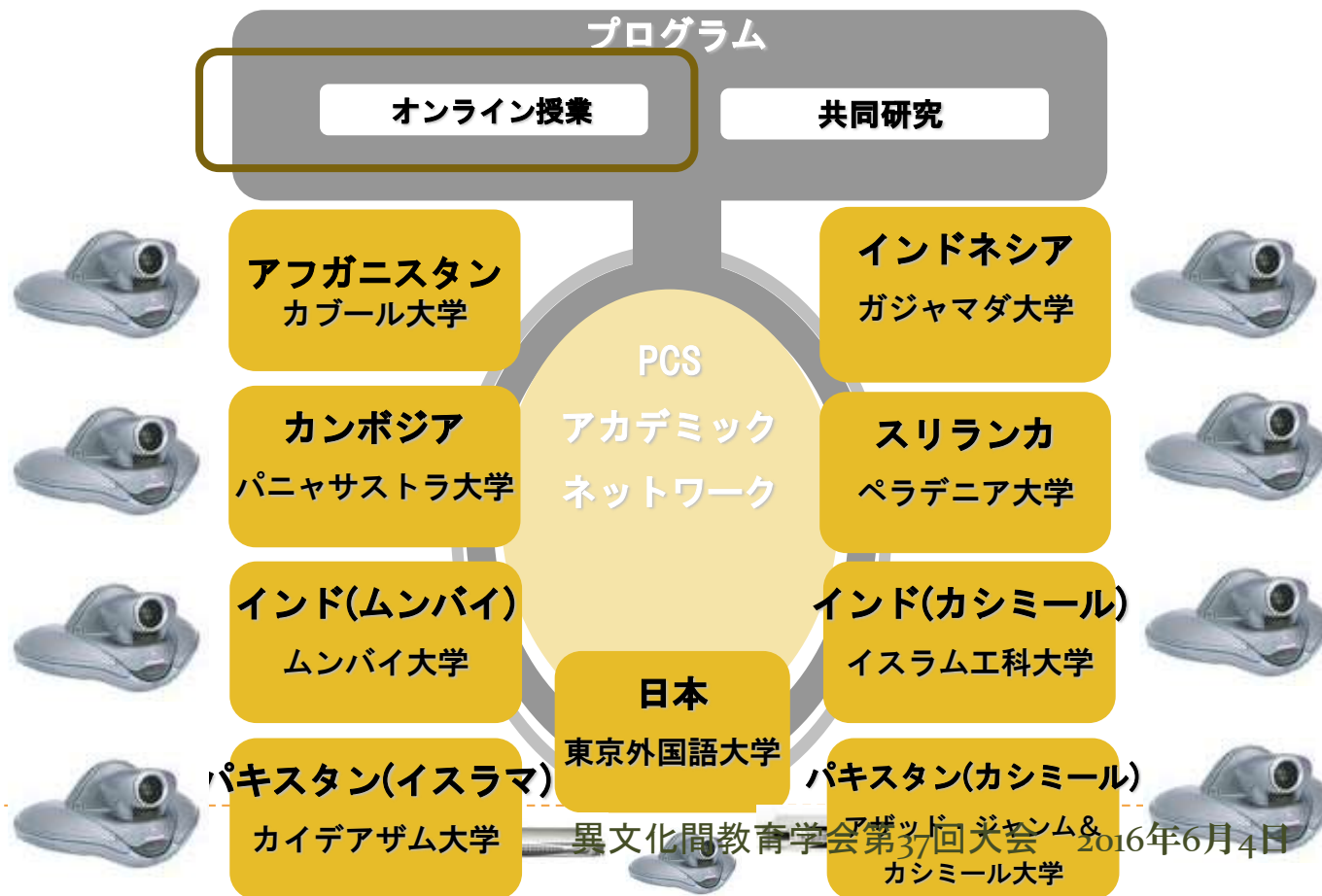
Uppsala Conflict Data Program (Date of retrieval: yy/mm/dd) UCDP Database: www.ucdp.uu.se/database, Uppsala University©2008

- 2004年：平和構築・紛争予防講座立ち上げ
- 東京外国語大学大学院は平和構築・紛争予防講座(Peace and Conflict Studies: PCS)を立ち上げ
- PCSは平和構築や紛争予防に貢献する人材を育成することを目的とする
- 2006年：**PCSグローバル・キャンパスプログラム(GCP)**立ち上げ
- 東京外国語大学大学院PCSの授業の一環としてGCPを開始
- GCPは国境を超えた学生・教員同士のコラボレーションによりPCS分野での共同教育及び共同研究を実現するための学術協働プログラム
(開始より3カ年は文部科学省の「大学の国際化推進プログラム」により助成)

グローバル・キャンパスプログラムとは

- 平和構築・紛争予防分野(PCS: Peace and Conflict Studies)での国を超えたアカデミック・コラボレーションの実現
- 国際連携による共同研究・教育の実施

グローバル・キャンパスプログラムの連携枠組



関係大学 教員

インド、カシミール
平和学・国際関係論



カンボジア
国際政治学・国際関係論



インド、カシミール
平和学・国際関係論



インドネシア
社会学



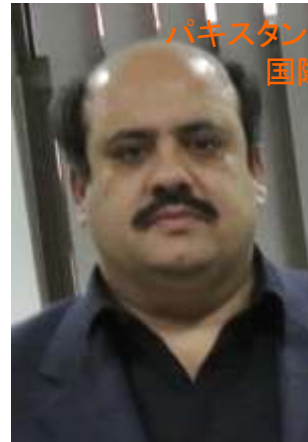
インドネシア
平和学



パキスタン、カシミール
国際関係論



パキスタン、イスラマバード
国際関係論



インド、ムンバイ
ソーシャルワーク門



インド、ムンバイ
ソーシャルワーク



異文化間教育学会第9回大会
社会学



2016年6月4日 日本
平和構築・紛争予防学



オンライン授業概要

●構成：講義 & 参加者同士の間でのインタラクション

●基礎コース

目的：平和構築・紛争予防学の理論の学習

言語：英語

技術：ビデオ会議システム（同期接続）＋ウェブサイト

スケジュール：週1回3時間で5週間継続

フォーマット：教員による講義、参加者間での討論

●上級コース

目的：理論を用いての平和構築・紛争予防学のケーススタディの考察

言語：英語

技術：ビデオ会議システム（同期接続）／e-mailやSkype＋ウェブサイト

スケジュール：同期接続（全体講義）と研究含め、基礎コースよりやや長い

フォーマット：教員による講義、参加者間での討論、研究活動



[基礎コース&上級コース]ビジョン



To contribute to the realization of societies based on the principles of sustainable peace, human dignity and equality through university partnerships

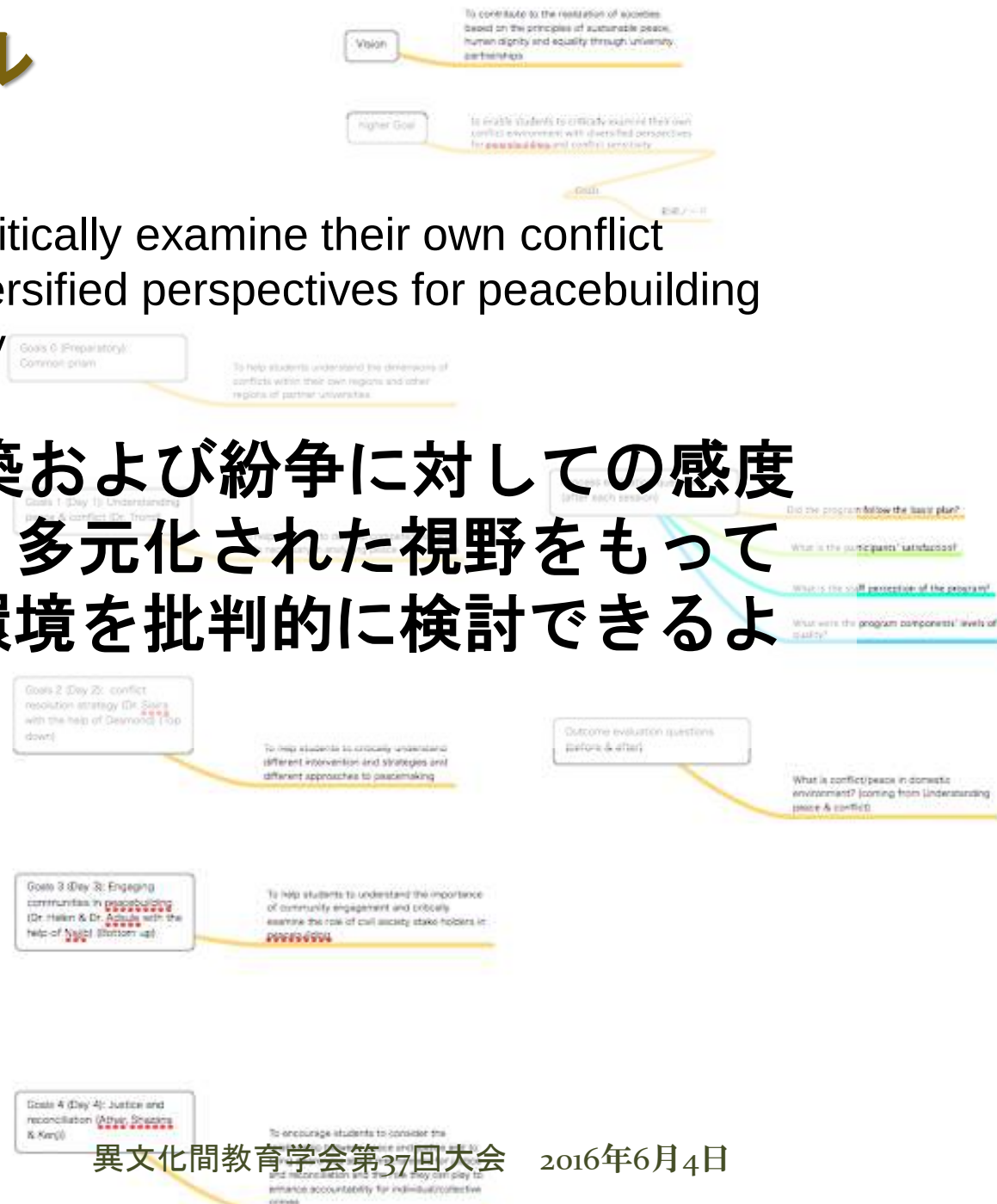
大学間連携を通して、持続可能な平和、人間の尊厳、平等の信条に基づいた社会の実現に寄与すること



[基礎コース]ゴール

To enable students to critically examine their own conflict environment with diversified perspectives for peacebuilding and conflict sensitivity

学生が、平和構築および紛争に対しての感度を上げるため、多元化された視野をもって自身らの紛争環境を批判的に検討できるようになること



[基礎コース] 授業内容

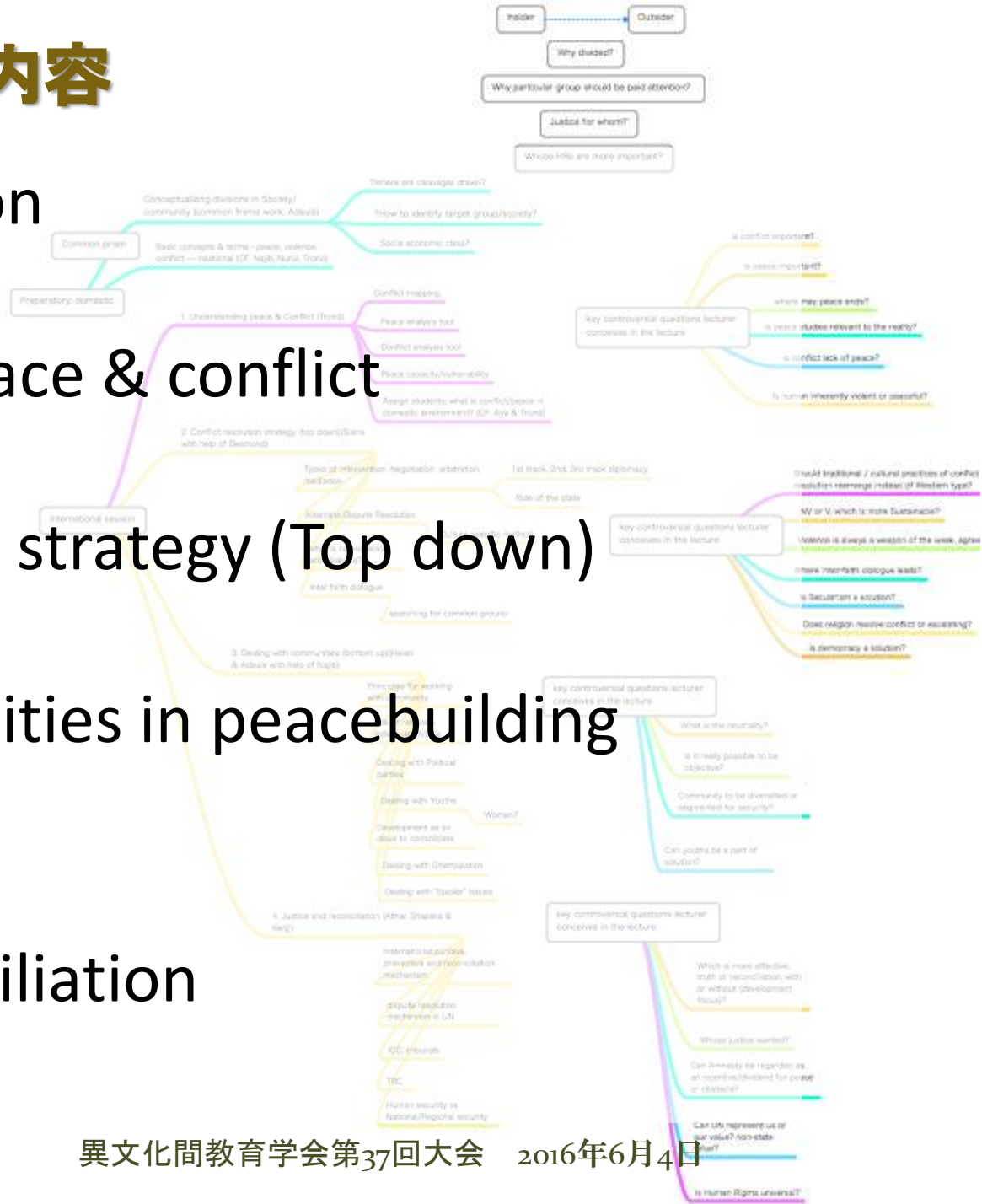
● Preparatory Session

● Understanding peace & conflict

● Conflict resolution strategy (Top down)

● Engaging communities in peacebuilding (Bottom up)

● Justice and reconciliation



[上級コース] ゴール

To equip students with the skills and competence of analyzing and applying the theories of PCS in the context of international diversity.

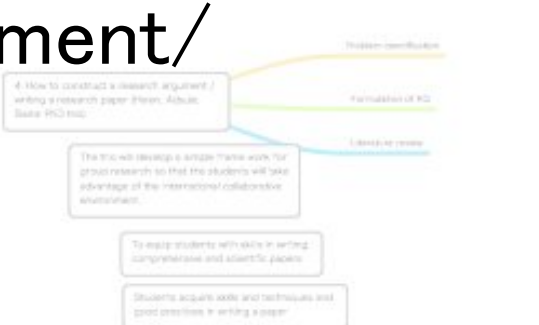
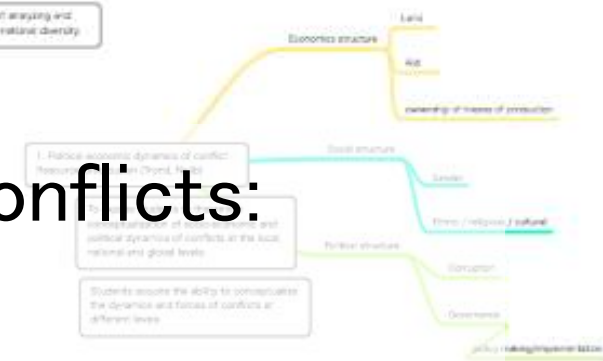
学生が、国際的に多様な文脈の中で、PCS理論の適用と分析のスキルと能力を身に付けること。



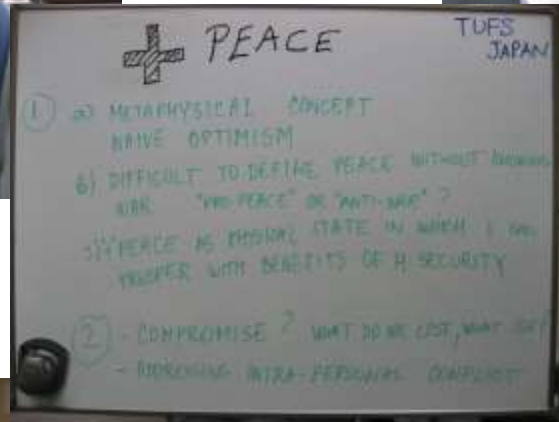
[上級コース] 授業内容

- Political-economic dynamics of conflicts:
Resource Distribution
- Tools for analyzing conflicts
- Intervention techniques for conflict resolution
- How to construct a research argument/
writing a research paper
- Students' Presentation

To equip students with the skills and competence of analyzing and applying the theories of PDS in the context of international diversity



オンライン授業風景



オンライン授業風景

放送大学のビデオ

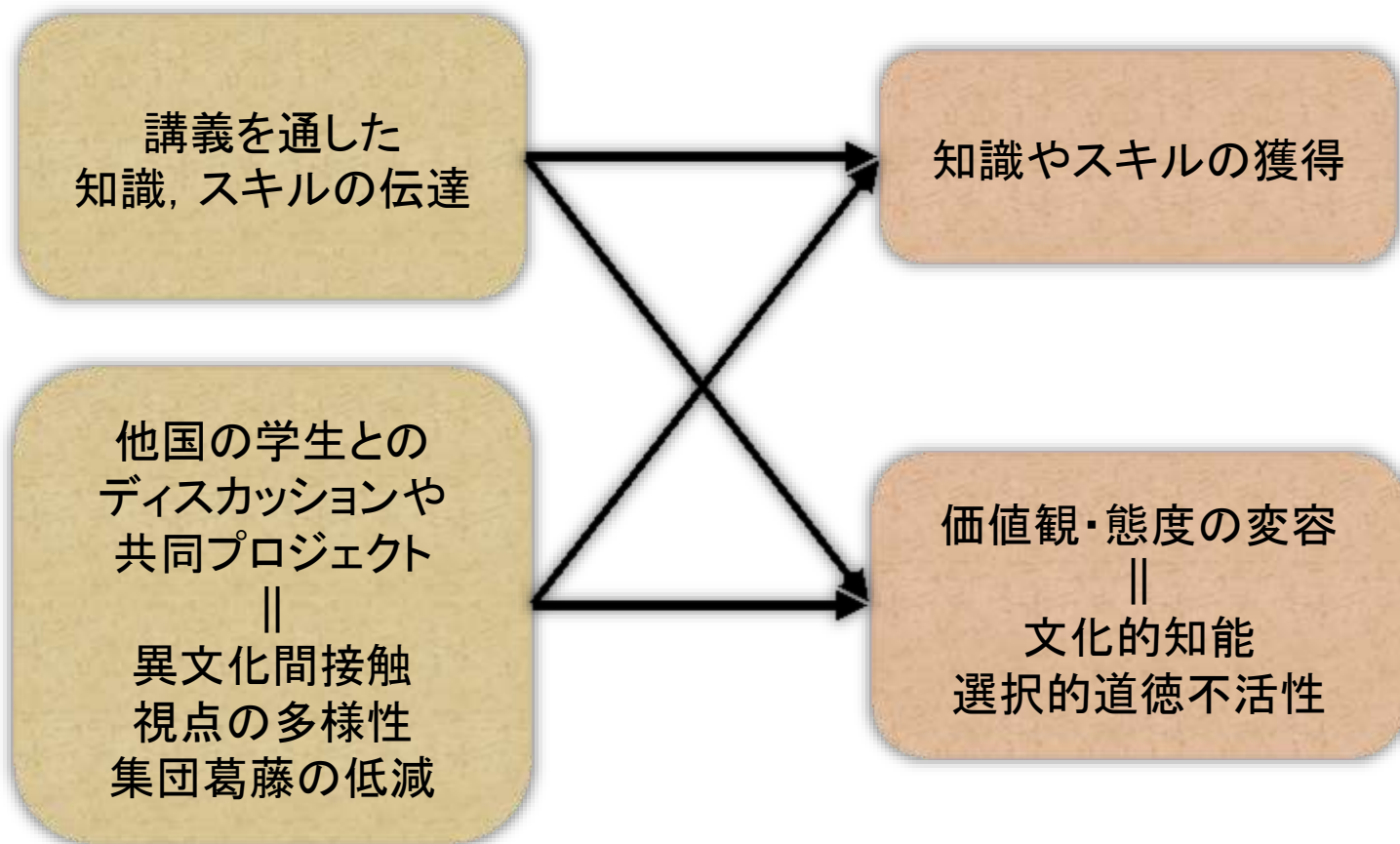


グローバル・キャンパスプログラムの 評価の試み

GCPの教育内容と教育目標との関連

教育内容

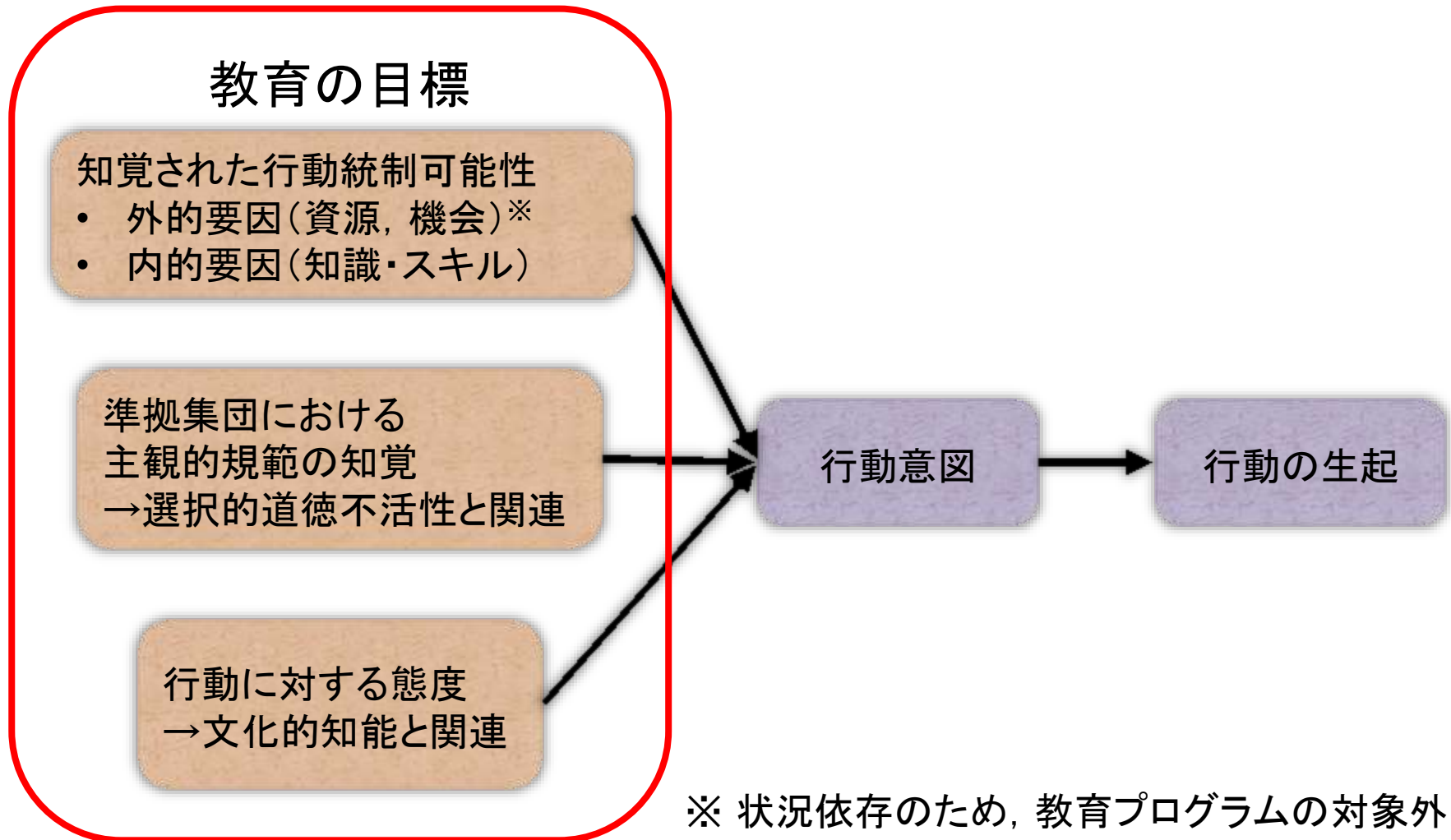
教育目標



GCPが目指す価値観・態度の変容

- ▶ 文化的知能 (Van Dyne et al., 2012)
 - ▶ 文化的に多様な場面に立った個人が、その場面で効果的に機能する能力
 - ▶ 単純接触仮説による他者への好意 (Zajonc, 1963)
 - ▶ 共通目標による集団間葛藤低減 (Sherif et al., 1961)
- ▶ 選択的道德不活性 (Bandura, 2001)
 - ▶ 道德的行動＝逸脱行動の抑制
 - ▶ 特定の状況下で、逸脱行動を抑制する基準となる道德的判断の活性化が阻害される
 - ▶ 協働的学びを通じた、価値観の多様性、逸脱行動の結果に関する学習により、不活性が低減

平和構築へ結びつく行動を生起させるために —計画的行動理論 (Ajzen, 1985)—



これまでに示され成果

- ▶ 紛争の原因, 解決に対する主体的関与の意識の上昇
 - ▶ 道徳的不活性が, わずかに低減
 - ▶ 文化的知能が, わずかに上昇
- (以上, 池田・福田・宮城, 2014, 2015等)

→ 教育の内容や方法との関連は？

→ 教育の内容や方法の改善, 発展の方向性は？

プロセス評価とアウトカム評価

		アウトカム評価（目標達成の評価）	
		良い結果が得られた （目標が達成できた）	良い結果が得られなかった （目標が達成できなかった）
プロセス評価（取り組み方の評価）	計画どおりに進んだ		計画と目標が合っていなかった  計画を改善する
	計画どおりに進まなかった	計画と実際と、 どちらがよいのだろうか？  どちらのほうが簡単か？ どちらのほうが確実か？ 偶然？	計画通りに進めば 次は目標が達成できるかもしれない  もう一度、計画通りに実施してみる 計画に無理があったのかもしれない  実現可能な計画を考える

本発表の目的

- ▶ グローバルキャンパス・プログラムのプロセス評価
 - ▶ 文化的知能, 選択的道德不活性の変化と, 学生が知覚する各回の授業の質との関連を検討する



- ▶ 教育プログラムの効果についての検討
 - ▶ 何が良かったのか？
 - ▶ 何が良くなかったのか？
 - ▶ どうすればよいのか？

方法

▶ 調査対象者

- ▶ 2015年6月～7月に行われたGCPアドバンストコースの受講者72名。ただし、前7回の調査の回答者数は8～48名。

▶ 調査方法

- ▶ インターネット調査サイト“Survey Monkey”を使用

▶ 調査内容

- ▶ 事前一事後調査
 - ▶ 文化的知能 (Van Dyne, 2012)
 - ▶ 選択的道德不活性 (McAlister, 2001)
- ▶ リフレクション・アンケート (各授業終了後, 全5回)
 - ▶ 授業の質に対する認知 (5件法)
 - ▶ ほか (自由記述を含む)

文化的知能, 選択的道德不活性の変化量と 授業のクオリティ認知との相関係数

		第1回		第2回		第3回		第4回		第5回	
文化的知能											
	方略	-.040		.166		.561		.515		.660*	
	知識	.300		-.128		.871 †		.652 †		.755**	
	動機づけ	.049		.390		.595		.541		.130	
	行動	-.011		.198		.452		.536		.216	
選択的道德不活性											
	結果の歪曲	.186		.048		.000		-.033		-.285	
	倫理的正当化	.262		.175		.932 *		.493		-.050	
	責任の拡散	.210		.421 †		.861 †		.133		-.363	
	都合のよい比較	.304		-.023		.663		.215		-.380	
	非人間化	.305		.034		.802		.722 *		.509	

† p<.10, * p<.05, ** p<.01

考察

- ▶ 第1回目と第2回目以降とでは、影響力に違い
 - ▶ 文化的知能→後半の授業との関連が強い
 - ▶ 道徳的不活性→中盤以降の授業との関連が強い
- ▶ 違いが生じた原因
 - ▶ 授業担当者へのフィードバック
 - ▶ リフレクション・アンケートの集計結果を、翌週の授業実施前に、授業担当者全教員にフィードバックをおこなっていた。
→ フィードバックを反映させることができた第2回以降、学生のニーズやコメントなどを反映させた授業実施ができた(?)
 - ▶ プログラムの内容面
 - ▶ 当初、第1回目からグループプレゼンテーション実施予定だった。
 - ▶ 準備等の都合上、実際には2回目以降に実施
→ 集団間接触等の機会が生まれたから？

今後の展望

- ▶ プロセス評価項目の適切性
 - ▶ 改善提案, 要望についての自由記述(分析中)
機器や設備, 外国語(英語)によるコミュニケーションの問題が中心
- ▶ プロセスとアウトカムとの対照
 - ▶ 相関分析以上の詳細な検討(自由記述を含む)
 - ▶ 授業内容の詳細な記録
- ▶ 授業内容, 方法へのフィードバック

引用文献

- ▶ Bandura, A. (2001) Social cognitive theory: An agentic perspective, *Annual Review of Psychology*, 52, 1–26.
- ▶ 池野 範男(2009). 学校教育における平和教育の課題と展望—原爆教材を事例として— IPSHU研究報告シリーズ, 42, 400–412.
- ▶ McAlister, A. L.(2001). Moral disengagement: Measurement and modification. *Journal of Peace Research*, 38, 87–99.
- ▶ Van Dyne, L., Ang, S., Ng, K.-Y., Rockstuhl, T., Tan, M.L., & Koh, C. (2012). Sub-dimensions of the four factor model of cultural intelligence: Expanding the conceptualization and measurement of cultural intelligence (CQ). *Social and Personal Psychology: Compass* , 6, 295–313.

関連研究

- ▶ Ikeda, M., Fukuda, A., & Miyagi, T. (2014). Evaluation of an international online education for Peace Building and Conflict Resolution in Asian Conflict-Affected Area. Evaluation 2014, American Evaluation Association.
- ▶ 池田 満・福田 彩・宮城 徹(2014). 紛争当事国の大学生における紛争認識—平和構築・紛争予防教育プログラムの効果測定へ向けて 日本グループダイナミックス学会第61回大会
- ▶ 池田 満・福田 彩・宮城 徹(2015). 紛争当事国の学生が抱く紛争認識—原因, 解決における主愛的関与の意識— 応用心理学研究, 41, 98-99.
- ▶ Ikeda, M., Fukuda, A., & Miyagi, T. (2015). The Effect of a Peace-Building Education on Ethical Decision-Making among Students in Asian Conflict-Affected Nations. 15th SCRA Biennial Conference.
- ▶ 池田 満・福田 彩・宮城 徹(2015). 平和構築・紛争予防教育が道徳からの離脱に与える影響—紛争経験国における平和教育プログラムのプログラム評価への示唆— 日本応用心理学会第82回大会
- ▶ 池田 満・福田 彩・宮城 徹(2015). アジアの紛争経験国を対象とした平和構築・紛争予防教育プログラムの評価 日本薬化学会第16回全国大会
- ▶ 宮城 徹・池田 満・福田 彩(2014). 紛争経験国の学生が抱く紛争認識に関する探索的研究—多国間共同による平和構築・紛争予防教育実践の評価へ向けて— 異文化間教育学会第35回大会

以降，予備

文化的知能

- ▶ 文化的に多様な場面に立った個人が、その場面で効果的に機能する能力（Van Dyneら，2012）
- ▶ 単純接触仮説（Zajonc, 1963）
 - ▶ 人は、繰り返し触れた刺激に対して、好意を持つ傾向がある
 - ▶ 多様な（対立関係にある）人同士が関わる機会を持つことで、好意度が高まることを目指す
- ▶ 共通目標の設定による集団間葛藤の低減（Sherifら，1961）
 - ▶ 葛藤状態にある集団において、集団が共有できる目標を設定し行動することで、集団間葛藤が低減する。
 - ▶ 課題等の設定による認知的な葛藤の低減

尺度：文化的知能（Van Dyne, 2012）

方略

- ・自分が有する文化に対する知識や異文化経験を目前の関わりに活用する方法

知識

- ・文化間の類似，相違を分析するために要する知識

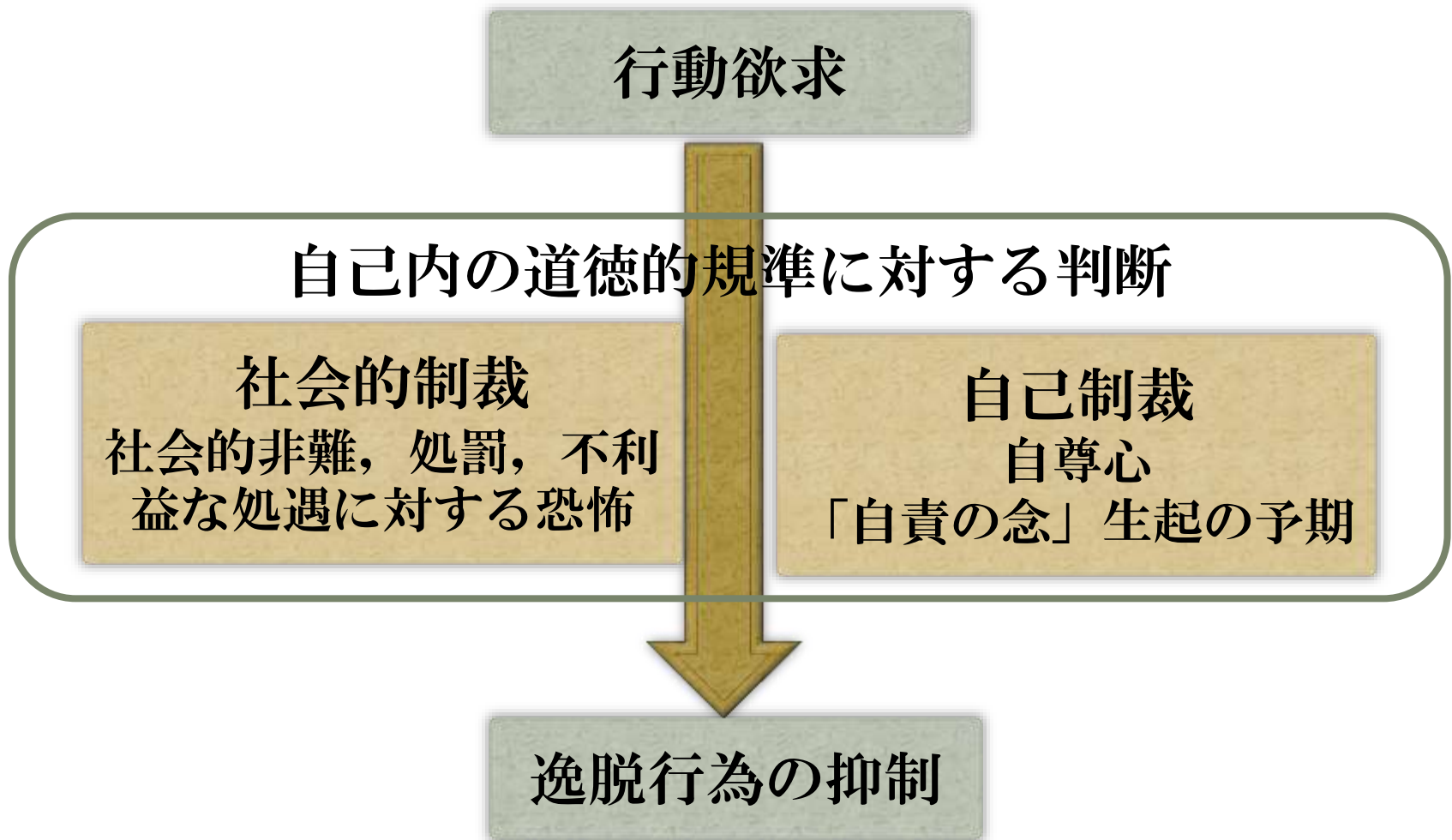
動機づけ

- ・異なる文化に対する関心や，関わりへの欲求

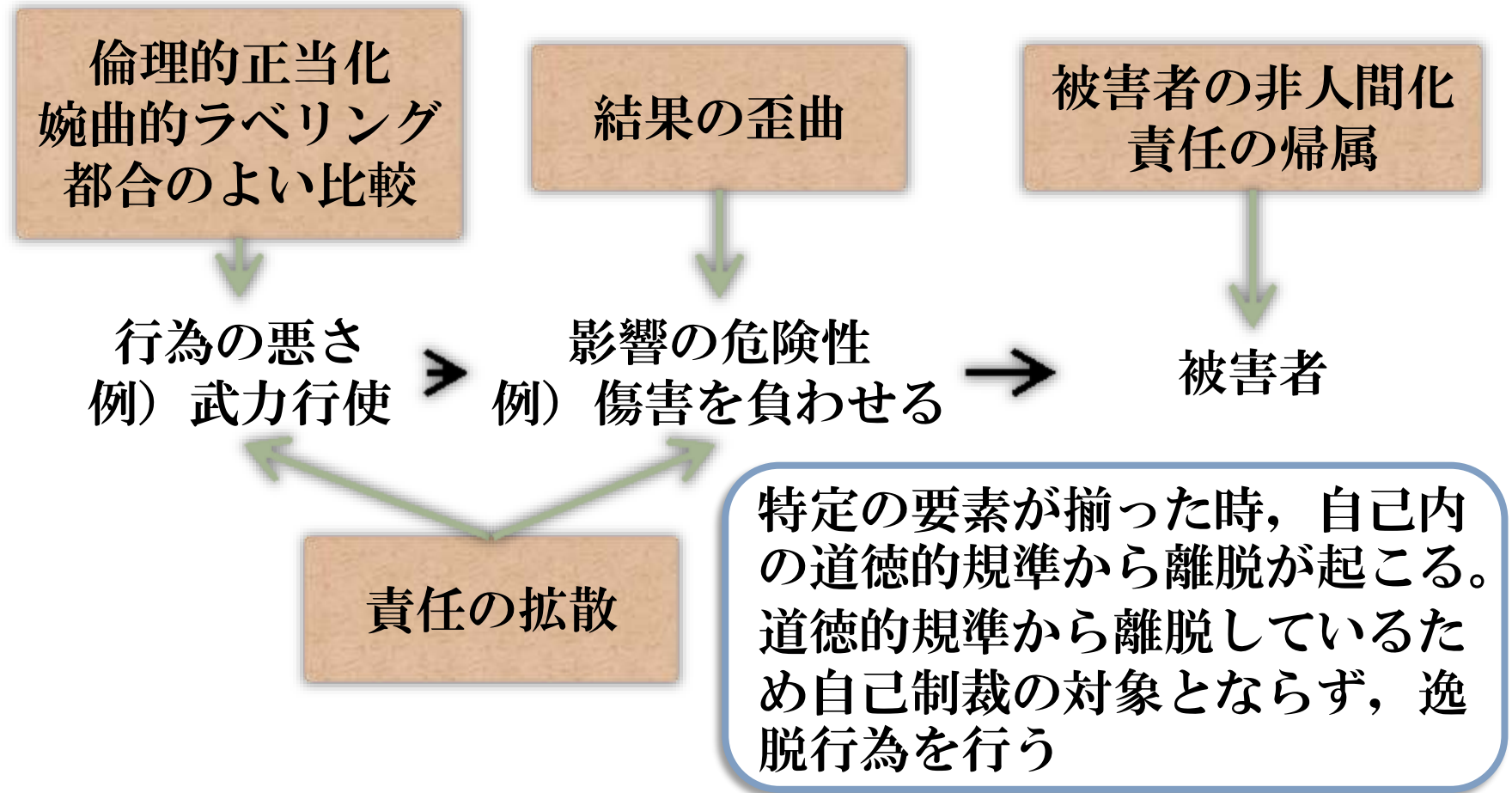
行動

- ・文化的に多様な場面で実際にとりうる行動レパートリー

自己調整メカニズムによる逸脱的行動の抑制 (Bandura, 2001)



選択的道德不活性 (Bandura,1999など)



道徳からの離脱に対する 平和構築・紛争予防教育の効果

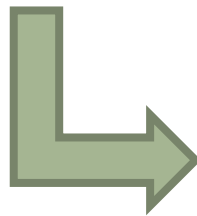
▶ 社会的学習理論：

- ▶ 道徳への取り組み（Moral Engagement）は，葛藤場面に対する平和的解決場面のモデリングを通して，社会的に学習される（Bandura, 1999）

平和構築・紛争予防手法の学習

共同プロジェクトを通して，
平和構築，紛争予防に対する
多様な考え方を学習する

ケーススタディから逸脱
のもたらす結果について
学習する



道徳不活性の程度
が低減？

尺度：道徳不活性

▶ Moral (Dis)engagement Scale (McAlister, 2001)

- ▶ Bandura (1999) に基づき、道徳不活性の程度を（１）結果の歪曲，（２）倫理的正当化，（３）責任の拡散，（４）都合のよい比較，（５）責任の帰属と非人間化の５側面について、「強く同意する」から「全く同意しない」までの５件法による回答

▶ 導入文

When do you believe your nation should use military force?
Should we use military force when . . .

「military force（武力行使）」

⇒直接的表現

「war（戦争）」

⇒婉曲的ラベリング

▶ 項目例

- ▶ 「被害が軍事目標に限定されるとき」）に対して、を求めた。ここで、導入文にあるしている。続く15項目で残る5要素について測定している。